

順に追ってみると次のようになる。

1987 年 12 月 耐圧殻完成
1988 年 3～4 月 耐圧殻水圧試験
(於米国 DTRC 水槽)
3～8 月 艤装工事
9～10 月 機器調整・陸上試験
11～12 月 水槽内試験

すなわち、現時点(1989 年初頭)で、潜水調査船自体は既に完成状態となっており(写真参照)、今後下記の主要工程を経ていよいよ引き渡しとなる。

1989 年 1 月 19 日 着水

1～2 月 渠中試験
3～8 月 結合試験及び海上試験
9～11 月 引渡前最終整備

海上試験では、約 1,000 m 単位で漸次潜航深度を増してゆき、最終的に 6,500 m までの試験潜航を行う予定である。

「しんかい 6500」が無事に完成し、深海調査に、その世界最深の性能を生かし活躍する日が待ち望まれる。

前ページに「しんかい 6500」のほぼ完成状態の写真(水槽内試験直前のもの)と一般配置図を示す。

6500m潜水調査船支援母船“よこすか”の進水

深海開発技術部



神戸港にその雄姿を浮かべた“よこすか”

当センターが開発建造中の潜水調査船支援母船“よこすか”(L_{pp}×B×D×d=95×16×7.3×4.5 m, 約 4500 総 t) の命名進水式が昨年 7 月 25 日、清子内親王殿下(紀宮さま)、伊藤宗一郎科

学技術庁長官をお迎えして川崎重工業(株)神戸工場で盛大に行われた。

当日は折からの異常気象の影響で朝から今にも雨が降りだしそうな雲ゆきであったが、式典の始

まる午後2時前には雲の切れ目から真夏の太陽が顔を覗かせるほどの絶好の天候となった。

式典は午後2時より、まず伊藤科学技術庁長官が“よこすか”と命名し、本船の船名募集で入選した飯田泰幸君（横須賀市立夏島小1年）がテープカットを行うと、船首に“よこすか”と船名文字が現れ、引き続き、紀宮さまがオノで支綱を切断され、多数の来賓、川崎重工従業員、数千名の一般見学者の見守るなか、静かに船台を滑り下り、神戸港にその雄姿を初めて浮かべた。

進水式は起工式、引き渡し式とならび船の建造にかかわる三大行事の一つである。特に今回は、紀宮さまをはじめとして多数の来賓をお迎えしたことで、当センター及び造船所にとって記念すべき進水式となった。また、式典の後、当地で祝賀パーティが開かれ、紀宮さまに記念品として、支綱切断に用いた記念のオノが造船所より贈呈された。

通常本船クラスの進水は、傾斜船台から船をその自重で滑り降ろす方法と、乾ドックに海水を注水して船を浮かべる方法に大別される。前者には、船台にヘット（牛脂）を塗って滑りやすくする方法（静かに滑る）と、ボールベアリングで滑りやすくする方法（轟音とともに滑る）がある。“よこすか”の進水は、傾斜船台にヘットを塗って滑り降ろす方法がとられ、進水時の重量約2,700トンの巨大な構造物が歓声のなか静かに滑り降りて

いくという感動的なシーンを多数の皆様にご提供することができた。

本船は、昨年2月に起工し、この進水のあと岸壁において艤装工事が進められ、諸試験を実施したのち、同年12月より海上試運転を始め今年4月からは、いよいよ6,500 m 潜水調査船“しんかい 6500”（三菱重工神戸で建造中）と組み合わせた総合海上試運転に入る予定である。その後、諸整備を実施したのち、来年4月、当センターに引き渡しを受ける予定である。

本船は、6,500 m 潜水調査船の母船としてその潜航を支援することを主な任務とし、そのための機能として、着水揚収装置、潜水船移動、格納装置、音響測位・水中通話装置、補給整備装置等を装備している。そのほかに、潜水船が採取したサンプルを分析・計測する装置、潜水船の潜航海域を効率よく事前調査するためのマルチナロービーム音響測深装置、水深400 mまでの流向流速の観測を行うドップラープロファイラー等を装備するほか、広範な海洋調査観測船としての機能も有している。また、救難・事前調査装置（10,000 m級無人探査機）、海面曳航式広域サイドスキャンソナー等将来装備予定の装置についても、その配置や動力源が十分に配慮されており、最新鋭の調査船システムとして海洋／深海調査に活躍が期待されているものである。